

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
(毎月一回・十五日発行)

(通第一〇四号)

目次

親鸞聖人の德音……………	近角常観……………(1)
常観先生随聞記……………	柳瀬留治……………(6)
蓮如上人の遺徳……………	花田正夫……………(9)
祖父の形見……………	田中克己……………(12)

慈

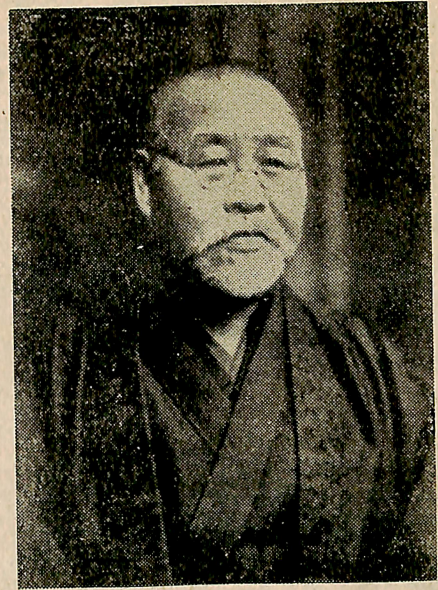
光

第九卷

第十一號

親鸞聖人の德音 (二)

近 角 常 觀



ところが、これは少々口にするのも勿体ない話であるけれども、信仰に氣のつかぬ間は、この法蔵菩薩の因位といふ点が、最も分り難いのである。尽十方無碍の光明、無辺の広大の恵みと聞くとまだ分るも、法蔵菩薩の御本願、五劫永劫の御苦勞と聞くと、最も頂き難いのである。と云うところが、初め真宗の法を聴くに一番分らぬ無理屈の処

が、弥々頂けて見ると、一番有難く、味ひのある処、親鸞聖人の御言葉が殊にさうなのである。親鸞聖人の仰せで、理屈でをかしい思ふやうな処が、弥々頂いて見ると其処が実に深い／＼あなたの思召のある所、一寸理屈で分らぬと思やうな処が、意味合ひのある処なのである。殊に、我々のこだはる点は、法蔵菩薩が本願を建て、五劫に思惟し、永劫に修行して我々を待つて居て下さるといふ、の点、こゝに真実の勝に於いて、而も最も頂けぬのである。

其処で、呉々も、詮索的考へや、理屈分別では分らぬ。全体阿彌陀仏が我々を助けると、尽十方無碍光如来と現はれて下されたその大もとが、我々の力に分るべき筈が無いのである。

我々が生れし以来、親が私のために心配し苦勞して下された、その一一の御苦勞は、我々掌に見る如く分らぬも、

其の親の心尽しを頂くは、あゝそれほどまでにこの者を思召し下されたのかと、その親の親心を頂く一点で頂ける。

ここさへ頂けば、さて今日まで長々迷ひに迷ひ、きはみなく仕て見やう無きこの者を、真に哀れみ見捨てぬ為に、親はそれ程長い間まつて居て下されたのかと、その遣る瀬無き親心を喜ぶ外、何も無くなつてしまふのである。

今この親様が我々衆生を哀れみ、長々苦勞して待つて居て下さるのである。我々は人生の事を考へると右にも左にも実に頼りがない。一寸夜の寝醒めに思ひ出して、我々今は斯うやつて居るのであるが、末はどうなるか、世は夢の如く実にたより無い。況んや親に別れ、子を失うた時は、殊に一入人生の味気なき事を感じるのである。更に人生の上を考へると、世は争ひ、衝突、矛盾、真に苦悩の世界、悲しみの世界である。

然るにここに不思議にも、阿彌陀仏の本願が居て下さる。何うかと言ふに、斯く生の從來する所も知らず、死の趣向する所も知らぬ私、先も知らず、後も分らぬけれども、現在かく事実上苦しんで居る私、その苦しみの私を遣る瀬なく思召し下されて、其の者を見捨てぬ、其の苦しんで居るそれが可哀想である、そのために、その者の光となり、救ひとなるために、態々苦勞して現はれて来て下され

た本願の親の阿彌陀仏なのである。

で、頂くは何処を頂くのであるか、此の浅間しきを見捨てず、助け救はねばならぬとの遣る瀬なき親心より、態々苦勞して、我々を救ひの爲めに現はれ下された仏が阿彌陀仏であるといふ、ここ一つを頂かせて貰ふのである。

全体真宗の教で、際立ちて有難いのは何処かといふに、阿彌陀仏とは救ひの仏でましますといふこの所である。即ち阿彌陀仏とは、我々を救ふ為に現れ下された救ひの御姿なのである。この外に阿彌陀仏を言うて見やうはない。衆生が苦しむから、それが可哀想であると、それを救ふために阿彌陀仏と姿が現はれて下されたのである。

大分今日は遠慮なく申すやうでありますけれども、も一つ申すならば、仏教と基督教、其他の教と比べて、之は信仰前でありますけれども、私は斯ういふ風に考へて居た。基督教には世界がどうかうなどいふ事があるけれども、仏教では苦を解脱すると説く。他教には世界支配などいふ事があるけれども、我が仏教ではそんな事が無くて、純然解脱の教である処が有難い。世界がどうかうなど無い処が有難い、と斯ういふ風に思つて居た。

処が段々信仰に進み、殊に他力門の味ひがいくらか分つて来ると、我を救ふ所の恵みなり、仏なりといふこととなる。すると今度は一層のこと、救ひの仏なり神なりとある丈の方が有難い、法蔵菩薩の因位などいふ事があるよりも、天地は神が造りて神が我等を救ふ、とある方が分り易いといふ風に考へを動もすれば持つた事があつたのである。これは動もするとよく人の持つ考へで、現に先日も、或る西洋より歸られた方が、恵みなり慈悲なりとある丈なれば分るけれども、本願に困る、といふことを言はれた。成る程もつともであるけれども、有難いのは何処にあるのか。その最も分らぬ所が一番有難い処である事に氣を附けねばならぬのである。

さてそれは何うかと云ふに、初めは仏教は解脱の教である所が有難いと思ふのであるけれども、彌々他力の信仰となると、今度は自分が救はれる問題である故、今度は唯恵み、救ひとある丈の方がなと思ふのであるが、その我がの分離解脱といふ事につき、その實際に我々が解脱を得るといふ問題につき、其の解脱を得せしめる為に態々現れて下された仏が他力の阿弥陀仏であるからである。むしろ世人は基督教の世界支配などといふ事よりも、實際只今の

苦悩に泣いて居る。その苦しむ様を見て、自力ではとても行かぬ故、これを解脱せしめ、その苦悩より脱がれしめる為に、態々現れて下された広大の阿弥陀仏なのである。

すると問題は、我々この人生の日夜の實際の苦悩にある、其の様を御覽下されて、その自分で解脱出来ぬを悲しみ思召され、其の者を解脱せしめ、救ひ上げるために、わざ／＼現れ下された仏、その遣る瀬なき親心より、五劫永劫の修行となりて現れ下された仏故、実に阿弥陀仏は救ひの為の仏なのである。で五劫の思惟、永劫の修行と説くのも、皆こちらの浅間しき心に、此の遣る瀬なき親心届けて、我々を解脱せしめ、救ひ上げる為め、……こちらの心の浅間しさが一通りで無い故、その一通りならぬ者を救ひ上げる為に現はれ下された教なのである。是れ実に法蔵菩薩の本願、五劫永劫の御苦勞、十劫正覚のお姿、又今現に稱へさせて貰うてゐる南無阿弥陀仏の御呼聲なのである。

故に蓮如上人は、先程も申す如く『御文』に、
阿弥陀仏のむかし法蔵比丘たりしとき、衆生仏にならずば、われも正覚ならじとちかひましますとき、その正覚すでに成したまひし姿こそ、いまの南無阿弥陀仏なりとこころうべし。これすなはちわれらが往生のさだまりたる証拠なり。云々。

阿弥陀仏と申すも、此の広大の御心の外にないのであります。

さて、して見ると他の事は何も入らぬ。我々生死の海、三毒の毒に悩み苦しんでゐる。その悩み苦しむ者をどうかして助けたい、その者を解脱せしめ度い、との遣る瀬なき心から、長々苦勞して現はれて下された阿弥陀仏で、その遣る瀬なきあなたのお心が、仏の本願である。この本願一つが大切なのである。此の本願がなくては我々に聞えて下さらぬ、この本願がなくては、仏のお慈悲は徹到して下さらぬ。

先きに申す如く『正信偈』を頂くと

無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる
法蔵菩薩因位の時、世自在王仏の所に在しまして、
無上殊勝の願を建立したまへり。云々。

処が、親鸞聖人は、この建立の字の御左訓を「ハジメテナス」とつけ給うてある。建立は、普通に言へばたて、事である。夫れを親鸞聖人は、わざ／＼「ハジメテナス」と読ませ給ひてゐるのである。

又聖人には次の如きお言葉もある。

無上仏とまふすは、かたちもなくまします。かたちも

ましまさぬゆへに自然とは申すなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とは申さず、かたちましますぬやうをしらせんとて、はじめて弥陀仏とは申すとききならひてさふらふ。——末灯鈔。

此のはじめてとある処が、実に有難いのである。我々を救ひ度いのお心より、はじめて現はれ下された阿弥陀仏のお姿、阿弥陀仏の本願なのである。

そこで、譬で言へば、阿弥陀仏の親心の槍の先きの、ぎり／＼の切先は何であるか。仏がわれ／＼の苦しむ様を見そなはして、広大の本願を起し、尽十方無碍光如来と姿を現はして、吾々の上に遣る瀬なき親心を加へて下さる、その遣る瀬なき親心のそも／＼のはじめ、大もとが、我々に届いて下さる切先なのである。

仏はお慈悲の方故、昔から我々を哀んで居て下さるから有難いでは、仏が本願をお建て下された初めが頂かれぬ。

ここを聖人は『行巻』の中に

聞くと言ふは、衆生仏願の生起本末を聞きて、疑心あること無し。これを聞といふ。

と。即ち、衆生仏願の生起本末を聞かせて貰ふのである。生起本末とは、即ち法蔵菩薩の願をお建て下された初め、大もとである。このもとが肝腎なのである。

何故かと言ふに、他に目当がありてお建て下された本願ではない。この親は、汝等衆生が悪が止まぬ、それが可哀相で起す慈悲故、先づ汝等自分の心を省みよ。その悪いことの止まぬ、苦しみの離れぬ、その汝の心が、仏願の生起本末なるぞ、それが吾が苦勞の大もとなるぞ、とあるのである。そこでこそ親鸞聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずるに、ひとへに親鸞一人が為なりけり。さればそくばくの業を云々」とのお喜びが出て来たのである。

五劫思惟を遠い昔の事のやうに思うて居ては、大きに間違ふ。吾々が心中に、日夜止まずに起る悪い心、これが仏を泣かしめ奉つた大もとなるのである。これが仏をして、わざ／＼一如法界の都より法蔵菩薩と現はれしめ奉り、この悪い心が長々御苦勞、御心配をせさせ奉つたのである。実に私の心の浅間しきが、仏の本願の大もと、といふ事になるのであります。

(未完)

常観先生隨聞記

柳 瀬 留 治

常観先生十七回忌の法要が江州のお寺であつたといふ。歲月の流れるのは夢のやうです。先生を思ふにつけ、御生前講話の上で常々繰返して申されました幾つかのお言葉がありありと浮んで来るのです。

先生のお言葉は、一一信仰の体験を通してのお言葉で、御自身が人生苦悩の中、仏の大悲に救はれなされた喜び、

その進り出たもので、言々言葉といふより力の逆りであつた。救はれるとは力に引揚げられるのだといふことをつくづく感じるのです。

先生のお言葉は誠に御自身の救はれた仏の大願業力そのものが、口を突いて表はれたもので、そのお力に我々我執の胃が打破られて、先生のお言葉に順いて、多くの方が入

信された様子でした。

我々は一度安心させて頂き、喜んででも屢々元の暗に陥り、今日はここを伺がはうと思つて参り、先生の喜びに溢れるお顔に接すると、困つてゐた自己の迷妄が忽ち消え去つて、取立ててお聞きすることがなくなり、雲が吹き払はれた空の様に、何の障りもなく、広大な光の満ちみちた心になつて帰つたものです。

先生にお目にかかるとお心からちに電波の様に伝はつて来る、『君達のもやもやした心は百も承知の上の広大な慈悲だ』といった、慈しみの笑顔に、私共の小さな霜柱がめら／＼と消えるのです。

先生のお言葉は、言葉といふより力をちかに突き付けられるもので、廻りくどい説明でなく、『火とはこれだと、火を突き付けたら、皆さんは熱いといふであらう。仏はその火である。如何なるものも焼き尽す火である。俺は鉄だと威張つてゐても焼き融かさずんば止まない。私の如き煩惱強情の心も、参りましたと、胃を脱いで謝まる他はない』と仰言つた。その短刀直入なお話は先生の心の火を直ぐさまおつけられた気がします。

先生の晩年は病気で体が弱られ、語気が低くなられたが四十代から五十代の頃は情熱の籠つた御講話で、言葉といふより、信力が語気語勢をもつて我々の心にちかに飛び込まうとするものでした。従つて言葉も先生の体験から出る

独自の言葉が多く、その著しいものは、

『どこまでも五分五分の止まず苦しんでゐる私共を飽迄五分五分を離れた広大な御心で可哀想に思つて下される』。

この「五分五分」と「可哀想」のお言葉は一席のお話に必ず繰返されるのです。我々誰しも、その五分五分の心を持つてゐて人生上それに苦しむ。善いものは愛され、悪いものは人に嫌はれ、あきられる。『私が学生の頃、朝、道で先生に礼をし、先生がそれに応じて礼をしてくれないと何が私のことを悪く思つてゐるのではないかと、心を廻した。先生に聞くとそんなことがあつたかなあといはれることがあつた。又電車で持つ吊革がなく、滑りませんかと、吊革を譲つて貰ふとその人は一つしか持つてゐぬのを譲つたことが判り誠に失礼しましたといふと、いや人生はいみじいがいいですといはれ、そして五分五分の私が五分五分ならざる人にあふことがある。私共は少しでもよい事が出来たら、喜べたら、念仏が称へられたらと思ふが、仏の大きな慈悲の光の前には、たとへば蠟燭の灯も電灯も太陽の光の前には役に立たぬと同じで小さな光を頼りにしてゐるものを憐れみ給ふ仏のみ心の前には暗くて困ると嘆いてゐたものも、明るさを誇つてゐた電灯も全く何の役にも立たない、のみならずそした我々をあきれ給はぬお慈悲である』と。誠に私など永い間、信ずるから救はれる様に思ひ、喜べるのがよくて喜べぬのが悪いと思ひ、救はれるには救は

れる丈の資格がなくてはなるまいと、五分五分の考へから離れられずにゐた。常音先生から「救はれる値打など永劫に出ない。それを擲て出るものかの様に思つてゐて、未だ駄目です」と私ひのけてゐる。それで永劫に流転論廻するのだ」といはれて漸く判つたのでした。我々は飽迄五分五分の考へがこびり付いてゐる為に、唯の念仏だといはれる「唯」が判らず、かく喜べぬものだから、かく黒闇のもののだから、浅ましい心の止まないものだから、憐れで見捨てられぬ。といふ桁はづれのお慈悲が判らなかつたのです。超世の本願といはれるが本当にこんな桁はづれのことには世にあるものと思つてゐませんでした。誠に不思議といふ他ありません。常観先生は、

『この駄目なものを、仕様のないものを、可哀想に思ひ、憐れに思ひどこ／＼までもお見捨て給はぬのだ。親は満足な子供より片輪の子、出来の悪い子、道楽な子はよけいに捨てて置けぬ』と声をからして仰言る。そしてよく脊虫の子を持つた母親の入信を語られた。『或る日脊虫の子供が戸口に出て小学校の遠足を見てゐた。生徒達は口口に「あれあの脊虫の子よ」と指して通つた。子供は「わつ」と泣き出した。それを見た親は思はず飛び出て「この子つて生れ付きの片輪ではありませんよ。成りたくて成つたのではありません。人の子供の悪口はいつて貰ひますまい」とその子を掻き抱き千万無量の思ひで家の中に入つた。爾来そ

との大願業力一つ丈です。我々の持物は碌なものではなく、一つも役に立たぬのです。泥棒の持金と大差はありません。念仏とて仏からの貰ひ物で、碌な物を持たず空虚でして見様がないので頂いた物です。人生何物も腹を満たすものがなく、飢えに悩んでゐる私に、唯この念仏だと与へて下された食べ物です。いはば仏を食べ生きてゐる私共です。よく常音先生も仰言つた。「わしは蛇に生まれ付き、蛙を呑むより仕方のない人間であり乍ら、三尺の蛇が何とか二尺にならうと善を勤めたがる。蛙を呑む醜い蛇を憐れに思召して、お前が可哀想だ、わしが呑まれて遣らうと現れて下されたのが仏だ」誠に仏を食べ生きてゐる我々なんです。ただ誇りとする所はお慈悲の辺際なき広大なこと一つです。それにつけて更に思ひ出すことは常観先生のよくなされたお粥のお話です。

『高野の明遍僧都が夢の中で、天王寺の山門の前で、多くの乞食、病人に粥を煮て食べさせてゐる一人の僧がある。それを見た明遍僧都は、何と不思議な尊い僧であらう。あの僧は何誰か、と傍らの人に尋ねた所、あれは吉水の法然聖人であると応へた。僧都は夢ながら、かねて念仏一つを勧める法然の教はかたよつてゐると蔑んでゐたが、如何にも重病人の固い飯の喉を通らぬものにとつては、かく容易くすらくと喉を通る粥より外はない。かねて法然聖人が

の母親はそのことが寝ても覚めても心の悩みとなり、仕て見やうがありませんと訴へた。その仕て見やうのない子供、そのあなた、そうした宿業を持つて悩み苦しむあなたの仕て見やうのない心底を汲みとり、現にかく仏が憐れに思召し唱へよとのこの念仏でないか。と申されるや、その母は、仏とはそした方であつたかと喜ばれた。この話は何十回と申されたお話であつた。

先生はまたよく出獄人の話をされた。『善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや。親の心からすると、出来のよい子も可愛いが、出来の悪い子がよけい心配でたまらない。出所即刻、親の許に帰つて来いと、親がいうのであるが、子は少し面目が立つ様になつたら、手土産が出来たら、成功したら帰りませうといつて、帰らない。親は、手土産だの、成功だのそれこそお前には泥棒でもしてするより外ないであらう。碌なことのお出来るお前ではない、汚名のまま直ぐ帰つて来い。心配でたまらないと親が待つてゐる。親心はこれである。』と説かれた。誠に仏が我々の碌なことのお出来ぬことを知り抜いて、唯の念仏と仰せられるのに、喜べたら、信じられたら仰せに従ひませうといつてゐるのです。誠に仏に對し五分五分でゐるのです。我々の喜びと申すと、救はれたからの喜びで功利に基く刹那の感傷に過ぎず、直ぐに消えてしまふ喜びです。私共の救はれる資格は罪惡深重煩惱熾盛、それが可哀想で見捨てられぬ

唯念仏せよと言つていられる事はいかにもそれであつたかと感に打たれて夢が覚めた。誠に固いものの喉を通らなくなつた我々は重病人である。それと慈み与へ給ふのが念仏の粥である。粥がつまらないで、仕様事なしに食べてゐるが、それには無上甚深の功德を籠めて作つた粥である。美味いだらうが食べてくれとの仏の御心である。何物も喉ら通らぬ私に、何と深いお心ではないか」と先生は涙ながを申されたことであつた。

橘地亀治郎翁を悼む

柳 瀬 田 治

翁は八十五歳。わが常観先生と同年。先生の導きによる念仏の行者。昭和三十一年十一月二日、遂に息絶ゆ。

年長く親と慕ひ来し念仏の翁亀治郎死す南無阿弥陀仏み仏の慈悲の咽びの念仏の八十五年生きましにける憂きこと／＼聞え申して一道に四十余年を共に生き来し
み仏の深き恵みに涙垂り笑み喜ばす面輪目に見ゆ
浅ましき吾をばかくも憐ます御不思議ぞと咽び宣らし
せし

昭和三十一年十一月五日、誌す。

蓮如上人の遺徳

花田正夫

法然、親鸞の両聖によつて、浄土真宗の土台はしつかりと出来上つた。そして「人法を防ぐべからず」で、念仏の法難、師弟の分散、道場の破却、流罪、死罪、等々を越えて、真実の教法はいよ／＼光を放ち、心の餓え渴く人々に、甘露の法雨となつて、広く地を潤し満たしていつた。

然し、祖師の滅後百六十年、蓮如上人の誕生された頃、念仏の聲は広く世に伝波したけれども、真実の信心の灯がうすれてゐた。そして浄土宗の鎮西派の了蒼、西蒼の両師の名声は高く、その影響により『心に助け給へと思ひ、口に称名する』、即ち、念仏さへ申して居れば、臨終に助け下さるといふ、無信自力の念仏が流布して、それが世間一般の常識となつてゐた。

更に浄土宗の西山派の十劫安心とか、善知識だのみ、三業つりの、不拜秘事、等々の異義、邪義、秘事が、雑草の如く繁つてゐた。ために、真宗の御正意はかくれ、人の住まぬ山中の空家に狐狸が自由に横行すると云ふ惨憺たる有

候。然れば、御再興の上人にたまはしますものなり。』

とある。本願をたのみ、弥陀をたのみ、等々は、法然聖人、親鸞聖人、覚如上人、歎異抄、にも度々お知らせ下さつてあるが、

『雑行を捨てて後生たすけ給へと一心に弥陀をたのみ』

と、明らかに御教化下さつたことが、中興上人の古今独歩の御親切な御導きであり、これによつて、真宗の御正意があらゆる人々の心奥にとどけられたのである。

雑行を捨てて

くはしくは「もろ／＼の雑行、雑修、自力のころをふりすてて」と述べられてゐる。ここが善導大師、法然聖人と相承せられた、真宗の廃立の要である。『選択集』に

『夫れ速に生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中、しばらく聖道門を閑きて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲はば、正・雑二行の中、しばらく諸の雑行を擲て選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正・助二業の中、なほ助業を傍にして、選んで正定を専にすべし。正定之業とは、即ち是れ仏の名を称するなり。名を称すれば必ず生ずることを得。仏の本願に依るが故なり』

とある。廃とは、閑く、擲て、傍にする、ことである。立とは、扱ひ、選んで、専ら正定業の称名を修するこ

様であつた。

ここに大谷の御廟は、知恩院の下寺の観を呈し、蓮如上人の修学のための筆墨の資にも事欠くといふ始末であり、現代からは想像もつかぬほどの衰微頹廢ぶりであつた。

上人八十五年の御苦勞は、この再興ひとつにかかつてゐた。ことに如何なる愚痴、無智の者も、解り易く、さしよせて、噛み砕かれた、慈悲あふれる御教化に浴して、上人の足跡の到るところに、燎原の火の如く、信火行煙がおのづと燃え上つて行つた。世に中興の祖と讃えまつる所以である。

さて私は今、上人の御活動の中心、原動について讃仰申したいと思ふ。それには『御一代聞書、一八八』に『一。聖人の御流は、たのむ一念の所、肝要なり。故に「たのむ」といふことをば代々遊しおかれ候へども、くはしく何とたのめといふ事を知らざりき。然れば前々住上人の御代に『御文』を御作り候うて、「雑行を捨てて後生助けたまへと一心に弥陀をたのみ」と明らかに知らせられ

とである。法然聖人がここを判然と御説き下されたので、聖道家の反対をうけ流罪の難に遭はれたのである。ことに聖人は自力の菩提心を捨てて、専修念仏を勧められたことが解脱、明恵の両上人の怒りをかひ、「外道、魔説」とまで排斥せられる原因となつた。

然し法然聖人にして見れば、諸善万行、六度の行、等々の上求菩提、下化衆生の道は立派であるけれども、如何にせん愚痴、十惡の身には実行が不可能である。そこを他から如何に罵られ、何と非難排斥せられても、出来ないことは出来ないといひ悔告白される外はなかつた。そのいづれの行も及び難き身に、仏の方から選びに扱はれた、選択本願の念仏がましました。その称名の道こそ仏の本願にかなふ道であつた。法然聖人の独断の道ではなく、釈迦、弥陀二尊よりたまはつた白道であつた。

この血のにじむ廃立の道を、砕いて、易く、手短かに『もろ／＼の雑行をすてて』と蓮如上人は懇切にお勧め下さつたのである。

一心に弥陀をたのみ

くはしくは『われらが今度の一大事の後生、御たすけ候へとのむ』ことである。

後生とは、「後に無量寿仏国に生る」の意である。往生浄土のことである。然し蓮如上人の頃、天台宗で「後生善

所」と言ふ言葉が一般に流布してゐたので、それをそのまま上人が使はれたとも伝へられる。往生のことである。

聖道門は此土で証を開くのであるが、それは、智目、行足を缺く身には、心も言葉も及ばれぬ高嶺の月である。唯往生浄土、往生成仏の門ばかりが我等凡夫の唯一の通入出来る道である。若しその道が見出されないならば、人類は永遠の暗黒である。

この一大事の後生、往生ほどの一大事を、阿弥陀仏一仏がお助け下さるから『一心に弥陀をたのめ』とお勧め下さるのである。

血で血を洗つたのでは何時までたつても解決はない。煩惱具足の凡夫が、自分で自分の始末がつくものでないと、そこを見てとつて、だから他の力、弥陀をたのめと水際立つて御導き下さるのである。

『歎異抄』に「日ごろ本願他力真宗を知らざるひと、弥陀の智慧を賜りて、日ごろの心にては往生かなふべからずと思ひて、本の心をひきかへて本願をたのみまゐらすをこそ『廻心』とは申し候へ」とあるのが、この弥陀をたのむすがたである。

自力我慢の塊とも申すべき身は、一大事の後生のことについても、自力の心に終始して、何とかで長綱をひ

いて行く、それよりない。そこを見てとられて、蓮師は、難行をすてて、後生の一大事、弥陀を一心にたのめ！

と、『御文』に繰り返し、御勧化下さる。おたすけは弥陀にあるので、凡夫我の心には無い。「我身は悪しきいたずら者と思ひつめて……」。或は「我身の罪の深きをそのままおきて、かへりみず……」等と、繰り返されて、「一心一向に弥陀たのめ。たのむ一念の時、往生は一定、おん助け治定……」と仰せ下さる有難い極みである。

上人遺徳記の第三、滅後の利益に

「凡愚易往の教文をのこして、失道のもの指南とし、没後利益の言光をかがやかして、闇冥のものの慧日とし給ふ」とある。ここで蓮如上人の御遺した『御文』から、言光を放つて世の闇冥を照された、とあるのに今更の如く、讃仰、随喜、驚嘆申すばかりである。

阿弥陀仏の御正意を深く頂かれ、仏智から書き遺された『御文』は、そのまゝ弥陀仏の御徳の顕現である。阿弥陀仏の仰せそのまゝである。

上人御入滅後、十余年、上人の尊翰を安置し奉るところに常にかがやく光を拝むだ、と遺徳記にある。もとより心光であるが、上人に導かれた念仏者の間にあり得べき、当然なる不思議の一つであらう。

十月廿六日 稿了。

祖父の形見

田中克己

一、我をたのめといふお言葉は、そなたの後生はかならず引受くるで、安心せよとおことばぢや。うらからみると、凡夫の心はあてにならぬぞ、凡夫がいかに善心になつても、微塵も往生のたしにはならぬが、またいかなる悪心がおこらうとすこしも邪魔ともならぬ、往生は唯、我願力を以てかならず助くるぞよといふ心を、我をたのめと仰せられたのぢや。

一、善導大師の南無といふは帰命なりと仰せられた御釈を、一点の不審もなく聴聞しておかねば、人にいひまどはされたときに疑惑が起るぞ。南無といふはすなはちこれ帰命なり、亦これ発願廻向之義なりといふ御文を、南無といふのが阿弥陀仏に帰命してくれてあることと思ふか。御文章に、南無といふは帰命と申す心なり、帰命といふは衆生の阿弥陀仏にむかひたてまつりて、もろくの難行をすて

て、一心一向に後生たすけたまへたとのみたてまつる心なりとある。南無といふのが衆生にかはりて、阿弥陀仏にむかいて、後生たすけたまへたとのんでくれるやうにもみえる。又さうでない、みづからたしかに弥陀をたのみたる一念の了解もなきことをといふ御文もあれば、みづからたしかに仰せにおしたがひ申した思ひがなければならぬと思ふか。こゝはどうかといふに、南無といふはすなはちこれ帰命とあれば、南無といふのが即ちとりもなほさず衆生の帰命と信心ぢや。南無といふのは仏の必ず助くるの御勅命ぢや。勅命が信心ぢや。どうしてかといへば、必ず助くるの勅命を聞かしてもらへば、後生は助かることと、安堵の思ひとなる、かゝる機までも御助けと悦ぶ信心、元へもどせば、必ず救ふの御勅命が聞けたより外はない。これは五劫永劫の親の念力が、しぶとい私の心中にいたりといてくだされたのぢや。仏心が宿つてくだされたのぢや。もらふ

／＼とよくいふことぢやが、親心をもらふ、まこと心をも
らふといふのは、こゝの味ひぢや。此処に一人の貧人、ひ
もじさに乞食してあるいてゐた、ある家の門に来て見る
と、内には非常な御馳走を山の如く積み上げてある。これ
は何々の宴会で、この宴会に来ようと思へば、会費を幾ら
持つて来いといふならば、今の乞食は、我が為には全くの
よそごとで、空腹ではあるけれども、あまり不相応で、た
べて見たいといふ氣にさへなれず、目のまへに見ながら無
いも同じことぢや。ところがこの御馳走は貧困の者へ施行
の爲に出すのぢや、非人乞食のそのなかでも、殊におまへ
のやうな空腹な者こそ目あての正客ぢや、遠慮はいらぬで
這入つてたべてくれよの主人の言葉をかば、今の貧人、
さてはあの御馳走はこの私へくださるものと、慶喜の心
も起らうぢやないか。その悦ぶ心のもと、主人のやさし
き言葉がきこへた外はない。主人の言葉が乞食の不相応な
御馳走にあづかるに結着のついた安心ぢや。これまた發願
廻向と、御馳走を廻向してくださるおこころがとどいたの
ぢや。今真実大悲の親様が、十惡五逆の罪人を必ず救ふの
御勅命を、善知識の言葉の下に、われらが聞き得る一念、
さてはこの仕様模様のない私を御助けくださることのあり
がたやと、仏をたのみたてまつる信心は、仏の御勅命で發
願廻向の御まことが、私のむねに到りてくださったのぢ
や。さらに私が御聴聞の功でこしらへたのではない。そこ

で仏の我をたのめの御勅命が私の弥陀をたのむ機となり仏
の必ず救ふの御まことが、私の助かることのありがたやの
信心となるのぢや。これで南無と言ふは帰命、亦これ發願
廻向の義といふ味は、ようわかるぢやないか。それに本為
とか、浅間しいからたのまれぬと歎くは、まことに御本願
を疑ふのぢや。御勅命をふみつけるのぢや。思へば勿体な
いことではないか。最前の乞食が、私はあまり腹が空き過
ぎてをるから、あまり我が身が粗末なから、これではどう
もと二の足ふむと同じことで、甚だ以てつまらんぢやない
か。よつて、南無がたのんでくれたのでは萬々ない、ま
た、たのんだ思ひがあるとききむのでもない、凡夫の方に
は仕事は一つもない、唯々やれ／＼と大安心に御蔭悦ぶ
ばかり。往生の一段は、願力無窮の南無阿弥陀仏様の御一
人坊きで、私の方はどうもせぬなり、唯の唯で安々と往生
させていただくのである。

(註) 聞は即ち信なり

愈々臨末の時に至り、家族を集めて——我々凡夫の後生
はどうあつても地獄に落つることにきまりきつてをる、そ
のおつる衆生を必ず助くるの御本願であるから、私の方は
おつるなりが往生一定である。

私は重き罪業を背負うて地獄へ落ちねばならぬ、それを

親様が助けておくれるのぢや。ねえはん（息子の嫁のこ
と）親様は地獄へ落ちる者を助けておくれるのですぜ、おち
ぬものを助けるとは仰せられぬ、よつて罪のないものはた
すけられぬ、落つるものをかならず御助けくださりますぜ
近隣の人々皆来りし時——長々と一緒にとおもだちで、
まゐつたりもどつたりしたが、いよく／＼おわかれになりま
した。後生はどうでござりますか。私の後生は親様がたす
けてくださるのでござります。落つるものを必ず助くるの
御勅命であるから、地獄におつるなりが往生一定でありま
す。墮つるものを助けるぢやから往生については何の疑ひ
もないではありませんか。

つひしたらおちやうもしれぬではない、どうあつても墮
ちるのぢや。幾萬劫かゝつても助かることはできぬのでご
ざります。そのどうあつてもおちるものを、どうあつても
おとさぬが親様の御勅命であります。

一心一向におたすけを信するこゝろは、仮令人がどうい
はうと、一分きざみにきらるゝくるしみをうけようと、口
から血を吹かうと火を吐かうとも落つるものを御助けと御
慈悲を信するこゝろはかはらぬ。これが一心一向ぢや。一
心一向といふたしかな御了解がないと、此場にのぞむとす
ぐにかはりますぞ。一心一向といふことがきはめて大事で
ござります。私の方はおつる機より外になんにもござりま
せん。おつるものを親様が御助けくださります

明治四十三年四月四日。

(註) 臨末の時の法語は実に同じ意義を幾十返反復した
るものなれども、煩を避けて大いに省略を加へたり。
落つるものを御助けとは実に真宗安心の根本義この外に
なし、と。

然るに人往々落ちぬ身にならんと欲す、これ真宗の安心
にあらず。

最終に書したる一心一向の話は、幾度も落つるものを御
助けをくり返へしたるに、しかと苗針を打ちたる心地せ
らる。

此御言葉「一分きざみにきらるゝくるしみをうけようと
云々以下」は少しく了解に苦しむ処にて、稍もすれば、
たとひいかなる苦しみに逢ふとも、一心一向におつるも
のを御助けと、本願にしがみついてはなさぬとのやうに
聞こゆれどもさにあらず。この有漏の機体は苦に責めら
れ、いかなる形相を現すとも、自ら火炎を吐いて身をや
くとも、たとひ惡鬼来りて為に拉し去らるゝとも、又三
毒の汚心はいかに猛惡の炎を燃やすとも、如何なる程度
にまで悩乱すとも、凡夫身心の善惡は更に關するところ
にあらず、報土往生の一段に至りては、超然として偏
に本願力廻向による、更にわがはからふところにあら
ず。これ一心一向に如来をたのみ奉るたしかなる了解な
り。一心一向にあらずんば、わが妄計が交るゆへに、此

場のにぞむとすぐにかはるなり。私の方は落つる機より外になんにもなしと、おつる機に安住することを得るは、偏に仏智の不思議なり。仏智の不思議といふことは、おつるものを必ず救ふの御本願なり。可仰。

南無阿弥陀仏。

南無阿弥陀仏。

(伯父の跋)

此の父の形見を書き了りて、筆を擱きて熟々往時を追想するに、幻影了々として眼界に遮り、感懐措くこと能はず。時に父病篤うして不眠に陥り遂に一睡を取らずして病魔と闘ふ既に五晝夜、此時に至り往生之期已に近きを知り、一世之遺言と思ひ、病艱を忍び茲に最終の法話をなす。丁寧反復実に幾十返に及ぶ。不孝之児、時已に三十有九年、悲慙を受くる至らざる処なし。常に開法を主とし、家道を客とし、不断に鞭撻を仰ぎ、朝暮に慈訓を浴びながら、此時慰安を呈す、辞甚だ貧弱にして父をして意に満たしむる能はざりしを感ず。今にして当時を顧みるに遺憾極りなし。想ふに往者情を此の愚鈍之心中に残して、不惜之穢土を辞するに猶躊躇之念を遺したるなるべし。思うて茲に至れば、冷汗体に垂れ、慚悔禁じ難し。婆娑永劫の苦を棄て、報土無為を期すること、素より幾千師仏の恩徳によると雖も、亦此父四十年教養之効

法 信 抄

○ 直方市 吉田 延世

只今慈光誌落手。常観先生の德音に今更ながら有難涙にくれ申し候。

大浪のよせるが如くにくりかへし
説きし師おもへば涙し流る

○ 在米国 川 畑 愛 浩

この地で外国人と宗教の話をしようとは夢にも思つて居りませんでした。私達の仏教体験に興味を持つハンガリヤの学生が一人居ります。ドイツ語が達者ですから池山先生のドイツ語版の歎異抄を送つて下さい。この外人は母国への帰途日本に寄つて仏教を聞きたいとまで申して居ります。多分実現するでせう。……カークスビレに於て。

○ スタクトン市 北 条 恵 実

先般池山先生の意訳歎異抄有難う御座いました。米国の開教使は日校から老人迄一切を相手で大変です。……近い将来に米国開教使を米国内で養成するプランを樹ててその研究と準備工作にふみ出しました。パークレイ仏教研究所とニューヨーク仏教大学をこれに当てることとし、キリスト教の神学校なども視察して種々参考にして居りま

によらずんば、いかでか底愚の痴児をして、師仏の鴻恩を知らしむるに至らんや。唯願ふ、我子孫亦此の大法を信樂し、前後相率いて、無別道故の願船に乘じ、七宝樂利の故園に帰り歡喜來迎し玉ふ慈容を拝せん時、具に罪を謝し厚恩を報ぜんと期す。

大正四年八月十六日 伝三郎謹識

以上が、伯父香川伝三郎が私たちに遺して呉れた「父の形見」であります。数十年を経た今日、昭和三十三年の秋の彼岸の中日に、頭に霜を戴いた私が、広島島の飯寓でこれを筆写して居りますと、何かかう、血の伝統といふものが、脈打つて来るのを感じられるやうな気がします。顔を憶えてゐない祖父も、私の青年時代まで常に慈訓を垂れ、或る意味では父からよりも深い感化を受けた伯父も、私の血の中に生きてゐるやうに覚えます。

それにしても、私はこの伯父に対して、ずいぶん不遜な甥でした。「具に罪を謝し厚恩を報ぜん」といふ伯父の祖父に対する言葉は、そのまゝ私の伯父に対する言葉にしたと思ひます。

縦に、横に、この私につらなる深厚なる御縁に対し心か感謝せずには居られません。

(完)

す。一世、二世、三世となりますと日本語の力が薄れますので、その人達に語るには米国で開教使を養成するほかはないやうです。十一月一日。

○ 京都市 榊 原 徳 草

……一道会昨日無事厳修致しました。本日竹内帰来、名古屋の三日の会の様子を聞きました。京都と名古屋、東西呼応して池山忌を営み法雨に浴し居る有様を味い、只事ならぬものを覚えました。

……本年初の来会者の一人、中井英君は谷大で一年半、先師の独語を学ばれたそうで『父玄道師からは仏法など一度も勧められなかつたのに、池山先生が教室で念仏される教授で、歎異抄を読む氣にさせられたこと、現在の自分の発祥は先師の念仏の声と「ただ念仏して」の歎異抄から始まる」などと承り嬉しく思ひました。

白井先生の御話は「一子地」で、引續いての座談になり真飢な緊張味のあふれたもので、先生のよそで見られぬお姿を拝し格別の調がありました。……

○ 神戸市 治 田 や す

……先年御伺ひ申上げました時頂きました、白杵祖山老師の死を御自覚遊されての御詠、何度もくく拝誦して居ります。ことに病身の私には、又一入であります。

病苦にて念仏様はどこへやらのとの奥からコ、ダ、と

あとがき

肅々として秋が過ぎて逝きます。十一日三日、京洛の浄住寺で、池山先生の御影を前に一道会の方々が集られ、念仏の華が、菊花と共に咲きほこつたことでありませう。遙かに心を走せながら、当地でも池山忌を催しました。さて本月号は、十二月二日の近角先生の十七回忌を想ひ浮べながら編集いたしました。そこへ柳瀬留治さんの御原稿を頂き、常観先生の息吹に触れ得ました事は何より有難いことでした。且つは春蚓帖から近角先生の御写真、山田幸さんに復写して頂いて、御覧の通りの記念とさせて頂けました。

九月二十五日。大雨の中を岡山の西本清三氏御来庵。氏は青壮年の頃、菅瀬英芳師の御慈育を蒙られた方で、遠く深い御仏縁の方であります。去る七月二十日奥様が糖尿病の痼疾で遂に逝去され、その御臨末近くなられて「大分苦しうだから、わたしは枕元でお念仏申すから、あんたは、称へてゐる心持になつて、聞いておいで！」

と、しばらく念仏して居られると、どうしたとか、宿善が到来し、非常に喜ばれて、数日後に念仏の息を絶えられた由であります。

『今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来世のさとりのおまへの縁を結ばんとなり。われおくれれば、人に導かれ、我さきたたば人を導かん。生々に善友となりて、たがひに仏道を修せしめ、世々に知識として、ともに迷執をたゝん』との聖覚法印の『唯信鈔』を目のあたり教へられ、感銘深い一日を送りました。

△福島先生の大経結びの段は都合で本月だけ休ませて頂きました。
△祖父の形見、の田中さんの原稿は、襟を正さしめられるものがあります。梅林に近づくとき清香がたまたま如くに、信徳が常に四辺を温めて、染香人と讃えられるにふさはしい方々が、名をかくし、地に埋れて、然も仏法を伝承して下さる日本は、本当に有難い国であります。広島刑務所官舎。
△蓮如上人の遺徳は、すでに二ヶ月ほ

ど、感ずるところがありまして改悔文（領解文）を毎日々々拝読申して居りますうちに、をしへられた断片であります。

聚墨生

御案内

時、十一月二十八日（木）午後六時半
題、韋提希夫人
人、福島政雄先生
所、南区駈上町、一道会館

定価 一部 十七円（送共）
半年 百円（送共）
一年 二百円（送共）

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駈上町二ノ二八

印刷 人 本田 政雄
名古屋市南区駈上町二ノ二八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番